



あかい はた よしみ
赤井焔 誼さん

東日本大震災当時、私は中学1年生でした。今まで経験したことのない災害への恐怖と不安を感じたことを10年たった今でも鮮明に思い出すことができます。当時、私は自分にできることは何かと考え、町のボランティアに参加することにしました。避難所に物資を運んだり、がれきを片づけたりと、中学生の自分のできることは微々たるものですが、「ありがとう」と言ってくくださる人の暖かさ

がうれしかったのが今でも心に残っています。震災から10年たった今、私が思うことは、このような経験を震災を経験したことのない人たちに伝えていくことが私たちの使命であるということだと思います。これが



仲間と片付けボランティアをした赤井焔さん(左)

らいつ東日本大震災のような大災害が来るかもしれない中で、大切な家族や友人を守るために、私たちの経験を生かすことは私たちにしかできないということをして読んでいただいている方々にも改めて認識していただければ幸いです。



県北中学校校舎に貼られたメッセージ

自分にできることは何か

仮設住宅に移り、前向きになれた家の再建



罹災証明書などの受付



みき あきら
三木 彰さん

居たことを今でもハッキリと覚えています。家の中が散乱してしまい片付けをしていても度々の余震で作業も進まず、苛立ちや焦りやらのストレスから眠れない夜が続きました。そんな時に仮設住宅に入居することになって一安心しましたが、それでも初めての仮設生活や新しい場所での生活に対する不安は消えることがありませんでした。幸いにも家から近い仮設住宅だったので環境の変化が少なく、近隣の人たちにも恵まれてそれまでの不安が嘘のようでした。不安が無く

なったことで考えも前向きになり、家の再建など一歩ずつ前に進むようになりました。あの震災から間もなく10年が過ぎようとしています。震災以降生活様式が変化していきました。そして今はコロナ禍でさらなる変化が求められています。それでも震災の経験を生かしていつでも前向きでいられるように努力していきたいです。



県内でもいち早く仮設住宅の建設がはじまった

この故郷を子どもたちに残したい

真梨子さん

3月11日午前中に伊達市内の病院で翔太を出産し、その日の午後、東日本大震災が起きました。看護師さんが息子を抱え外に避難し、私もその後、支えてもらいながら外に避難しました。生まれたばかりの翔太を抱え数時間そのままの車にいるしかなくとにかく寒かったです。病院は電気は通っていましたが断水となり、主人が何度か水を運んでくれました。退院するまでの2、3日はずっと不安でした。

穰さん

次男の陽太が体調を崩し、病院にいるときに地震がきました。妻と生まれたばかりの子どもが心配になり陽太を妻の実家に預け、バイクに乗り夢中で病院へ向かいました。病院へ着いて無事だった2人を見てホッとしたのを覚えています。

退院後は妻の両親に妻や子どもたちの世話をしてもらい本当に感謝しています。

原発事故

について知った時は一瞬避難も考えまじた。しかし、子どもたちが大きくなって「ただいま」と帰れる場所を残しておきたいと思い、ここで暮らし続けることを決めました。



10年前の鈴木さんファミリー



すずき のりる 太輝くん ひなた しょうた 翔太くん まりこさん
鈴木 穰さん